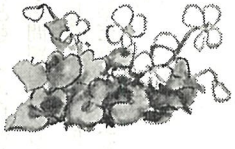
学生運動と同志社教育

杉田荘作

同志社の学生運動について何か書けとの指示を受けたが真正面からこの課題にとり組みまとめあげるようなことは到底私にはできそうもない。ただ十年近く学生部に籍をおき、その間、少し大げさにいえば昼となく夜となく悩み、あるいは悩まされ続けたもろもろの学生運動についての回想と私自身のそれに対する反省を語ることは可能である。そして、大学の教育施策というものが、一方では新島襄以来の同志社教育といういわば不変の大命題をかかげながらも、今日的な問題について、いわゆる学生運動家を中心とする学生たちの激烈な行動によって良かれ悪しかれ強い影響を受けてきたことも事実である。そしてこの事実は現代の特質でもなんでもない。それぞれ内容は異っても新島襄の時代から同志社百年の歴史の中で絶えず繰り返えされてきたことであり、逆にいえば学校当局の教育施策とこれに対する学生の反体制的運動の歴史が同志社百年の歴史をつくりあげてきたともいえるのではないか。

また学生運動に熱中している学生たちにも同志社教育を守り育てようとする意識が極めて強く内在している。これはあまり他の大学で見られない同志社の学生運動の特質ではないだろうか。かつて学友会の中央委員長が難問である諸要求を提起して学長団交を開くための交渉にきたとき、激しいやりとりがあったあとで、「君たちのような連中のいる大学へは子供を入学させたくない。こんなところで子供の教育はしたくない」という意味のことを私はいった。するとその夜、早速委員長が私の家にやってきて、「本当に子供さんを同志社に入れないつもりか」という。「そうだ」と答えると「同志社と他の大学と比べるといろんな点で見劣りするところが随分ある。しかし理窟では割り切れない、いいところが同志社にはある。どうか、子供さんをぜひ同志社に入れて欲しい。なんでしたら私が直接子供さんに会って同志社のよさを話させて欲しい」とのことであった。

また三十九年の学費改訂を決定する理事会が唐崎ハウスで開かれ、それを知った学



友会の学生が押しかけてきて、総長、学長、理事長が翌日の十一時頃まで文字通りかんづめになり、特に三人が大変な苦労をされたわけであるが、やっと学生が帰った直後に、おそらく学生の長時間にわたる不遜な言動に非常ないきどおりを感じておられるに違いないと思っていた理事長が発言された第一声が「あの委員長はなかなかしっかりした良い学生だなあ」ということであった。

決して賞めるべきことではないが、デモ等で学生はよく逮捕される際、警察関係の人の感想では同志社の学生はそのような時に、京大や立命の学生に比べて面会にくる学生、差し入れする学生が圧倒的に多いということである。

そうして、在学中暴れまわった連中に限って卒業してからも、今度は学生運動の立場を離れて同志社に関する関心というか、母校愛というか、が順調に修学した一般の学生に比して強いように思われる。結婚式なども同志社でやりたいと希望する連中も多いようである。

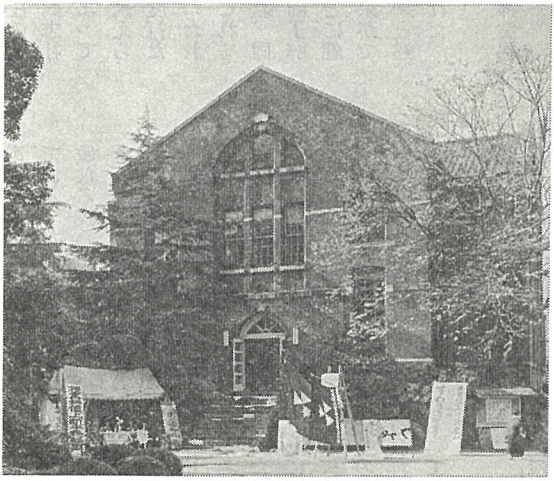
元来、学生運動というものは権威、権力体制に対する反抗、反体制運動である。従って国家であれ、あるいは大学であれ、その体制、権威、権力が強いほどその圧力は学生運動を根強いもの烈しいものにしてしまう。しかし、同志社の場合は他の大学に比して大学と学生との対立関係に、その底に何か温いものを私は感じとってきた。これは一体何によるのであろうか。現代の同志社が他の大学に比して特にきわだってそのような配慮を教育面で実施している具体例を私は知らない。またある場合にはそのことでの物足りなさをすら感じることがある。とくに国立大学等の教育体制と比較するとき同志社の外面的なひ弱さが目立つようにさえ思われる。そうして学生ストとか学生運動でしばしば学内に混乱を招いたとき、一体、大学は何をしておるかと非難の的となるのである。しかし私は一見ひ弱に見えるこうした現象のかげに他の大学にないものがありはしないか、同志社百年の存在がその裏にひそんでいるのではないかという気がする。

＊

少しながいけれども『同志社―その八十年歩み―』という小冊子に出ている「自鞭の教」の一節を引用してみる。

「訓育上の難問に直面された新島先生が、己が手を鞭って教訓されたことは、広く知られた逸事である。

明治十一年九月に十名計りの新入生



授業料値上げ反対すわり込み（昭和38年秋）

があった処へ、翌十二年一月に又六、七名の新入生があった。後者は仮令三ヵ月でも学力の差があるとして別級に編成されたが十三年には両者の学力差も接近したので教授会は両級合併を決議した。然るに三ヵ月古参組はこの措置を不満として容易に教授会の決定に従わず遂に無届欠席を敢てした。新島先生は極度に心痛し説諭に力められたが不平組はこれをもきかなかった。然し或る機会から先生痛心の状が学生に知れ、遂に彼等も先生を御宅に訪ねて陳謝の意を表し学級併合問題は解決した。

然し残るのは無届欠席なる校則違反の問題で、放置すれば校則の権威は墜ちるであろう。数日間の苦慮は遂に明治十三年四月十三日の朝拝式に於ける自鞭と成った。先生は、不幸にも無届欠席をする者の出来るに到ったことは誠に遺憾であるとなし、若し自分が行届いた方法をとり得たならばとここに到らなかったであろうと述べ、当局措置の不行届は校長たる自分の徳の欠けたるためであり、此の場合学生の校則違反はその結果である。然し同志社の校則は厳然たるものである。よって校長自らを罰すると述べ、特に携えられた生木の鞭で左の掌を二、三度打たれ、鞭は折れたが先生はなを打たれた。前列に居た学生等が驚いてこれを止めた。ややあって先生は『諸君、同志社の規則の重んずべきことは御了解になりましたか。又此の度のことに就て再び評論をしないという御約束ができますなら私はこれでやめます』と述べられ一同は非常な感激に打たれた、と云い伝えられる。」

これにつき故魚木忠一博士（神学部教授）は記して

「……新島先生は絶対に処罰という方法を避けられた訳ではないが、この事件に関しては、処罰を不適当と考えられたらしい。元来良心を教育せんとする精神主義教育に於て、校則に違反した生徒を自発的に悔悛せしめ得ないならば失敗である。この場合処罰は不本意なことであるのみならず、校規の厳粛さを生徒に自覚せしめるには不充分である。だが、かかる校風に対して鋭敏なる良心的反響がないのを何とすべきであろうぞ。斯くなれば誰を責めよう人もない。

良心を覚醒せしめ得なかった自己の〝不行届と不徳〟とを責むべきのみ。自鞭は残された唯一つの途であった。それは灼熱した良心が眠れる良心に訴えるための最後の一法であった。失敗すれば面目は丸潰れとなる。先生の如き虚飾なき至誠一貫の精神主義教育者が一生を賭して始めて行い得る処であった……。」

＊

新島先生がとられた行為は極めて強烈なものであったことは想像できる。杖は折れ、掌から血がしたたったともいわれている。しかしこの行為は魚木先生の評にもあるとおり極めて内省的な精神から出た自然なものであって、意図的に、あるいは教育的効果を期待してなされたものでは決してなかったろう。

恐らくその時の新島先生の心情は校則の

権威とか、校長と生徒、教育するものとされるものとの関係などは脳裡になかったであろう。それは平素から新島先生と生徒達の間に通じ合う心がすでにできていた。だから考え方によっては、生徒に対する一種の安心感、甘えるといった気持がなかったとは言えない。

そのような環境の中では永い説教も必要ではなかったし、教育的な冷静な処置もいらない、このような直接的な行動によって先生の心情を吐露することで充分生徒達に通じたのではないかと思われる。

生徒の校則違反と当局措置の不行届と二つの因果関係を解決するためにと考えるのは決めてアイディア的で芝居がかっていて、私にはなんとなく納得がいかない。

新島先生以来、同志社教育のシンボルともなっている〃良心〃という言葉は抽象的で内省的な言葉であって、少なくとも特定の共通した心情を持つ人々の中でしか通じない精神である。

極く少数の先生と極く少数の生徒しかなかった当時の同志社はいざ知らず、今の同志社に果してそのような伝統が生きているだろうかという疑問が当然あるだろうけれども、他の大学との比較から、また他大学から同志社を見ての印象などを聞くことから、私は同志社の〃良心〃がことという時に顔を出すのを信じているものである。

同志社の学生運動に関しても、私が学生部で出会わした、もろもろの事件――寮問題、生協問題、三度にわたる学費値上げ問題、十二・九暴力事件、学生会館問題等、もちろん、新島先生の時代と余りにも質か違っているし、また全国的な学生運動とのつながりもあるけれども、その内容及び解決については、考え方によっては同志社的な余りにも同志社的なユニークな内容、解決が展開されて来た。

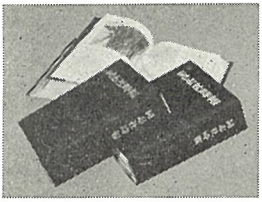
同志社の学生運動について以上のような観点から、私自身の回想として、また私自身の反省として是非、当時の事件の一つ一つについて書いてみたいという希望をもっている。

そして、もし許されるなれば将来、この誌面をお借り出来たら幸せである。

（昭16年大経卒・大学庶務課長）

本を傷つけず　ノリ付も不要で　合本製本できる

「同志社時報」合本ファイル



お申込みは
京都市上京区今出川通烏丸東入
同志社時報編集部

定価 200円＜送料65円＞

戦後同志社の宗教教育

茂　義太郎

私が同志社に帰ってきて、同志社教会牧師という立場に立って、同志社の宗教々育の一端に参与しはじめたのは、戦後まもなくともいうべき昭和二十年十一月からであった。それから二十二年余、このたび健康上の理由から、同志社教会牧師の職を辞し、同教会名誉牧師となったのであるが、今回、本誌に執筆を依頼されたので、戦後、私が同志社の宗教々育に参加し始めた頃の追憶を記すこととした。しかし、これはどこまでも私の思い出を雑然と書きしるしたものであって、同志社の宗教々育史というようなものではないことをご承知願いたいと思う。すなわち、手もとの当時の日記によって調査をしたり、正確な資料に基づいて書き綴るようなものではなく、どこまでも私の記憶に残っているものを走り書きをするものであることを、おことわりしておく。従ってなにぶんにも二十年ほどの昔なので、多少の誤りや不正確さのあることはお許し願いたいと思う。

一

昭和二十年十一月私が同志社教会牧師に就任するまでの同志社教会は、戦時中の非常時体制として大塚節治先生が執事の中から選ばれて代務者となり、教会の礼拝その他の集会を行なってきたが、戦時中礼拝は神学館（今のクラーク記念館）礼拝堂を借り受けて行なっていたので、就任の頃は、私も引き続き同所で礼拝を続けた。そのころはまだ男女の席がわかれていて、左側の男子席には二、三名の男子の役員、右側の女子席のほとんどが女子専門学校の寮生と女子の教職員で女子席は満員（といっても数は百名たらず）、一般の出席者は一人もなく、男子の学生も皆無であった。従って戦前、チャペルで行なわれていた同志社教会の盛んな礼拝とは雲泥の差であった。（同志社教会が現在のように栄光館で礼拝を始めたのは、昭和二十一年からであった。）

そのころは、現在のように各学校に宗教主任がないので、私は依頼されるままに、毎週一回づつ、各学校の礼拝に出席して奨励を行なった。といっても戦時中から戦後にかけて、規則正しく礼拝を正式に行なっていたのは、同志社女子専門学校と同志社女子中学だけであったが、しかしこの二校の礼拝は盛んなもので、女子中学はもちろん、女子専門学校も毎朝全校生が出席して礼拝を守るのが常であった。

ところが同志社中学は戦時中も、信仰的に立派な教師方が多く、個人的にはキリスト教的感化を与えられていたが、学校の行事としての礼拝がとだえていたので、昭和二十年の暮、クリスマスの頃から礼拝を復活したように記憶する。その頃私は前窪校長から週に一回ずつ礼拝の奨励を依頼されたが、その頃の生徒は讃美歌を全然知らず、まずそれから教えてかかるという風で、従って初めは礼拝というよりも朝礼のような感じで、奨励といっても精神講話に近いものであった。そして毎週、礼拝に出席し、礼拝が終わると校長室で前窪先生がみずからおいしい煎茶をいれて下さったことを思い出す。そして、そののちは、次第に礼拝が整備、立派な礼拝を守るようになったのであった。またそのころまだ北寮の建物が残っていて、今の学生会館のあるあたりの北寮の畳の部屋で、十数名の中学寮生と礼拝を守ったことが思い出される。寮務主任は西田賀次教諭で、同氏は家族ぐるみ生徒と生活を共にし、まだ物資の乏しい時代にも親しく寮生の霊肉の指導に当っておられたのであった。

寮の宗教活動といえば、最も盛んなところは、女子専門学校の寮であった。これは片桐校長の指導の賜物というべきで、常盤寮、プリンプトン寮、洗心寮等には、それぞれ信仰に熱心な舎監がおり、夕拝その他の宗教行事が行なわれていた。また、女子中学の平安寮も、人数は少ないながら熱心な夕拝が守られていて、同志社伝統の信仰の灯はここに保たれていたというべきであろう。

二

当時はまだ六三制の教育制度が布かれていなかったので、旧制中学から同志社大学に進むもののために予科があって、山田貞夫氏が校長として、かっちりとした教育が行なわれていた。校舎は今の弘風館あたりにあった木造二階建ての建物で、一クラス五十名くらいで一学年六クラスであったと記憶する。教師陣も現在の同大教授の長老格の方々であるが、そのころは若手の教授方で、授業も身の入ったものであり、教室においても教師と生徒との間に親しみが通っていた。現代の大学教育はマスコミの様相を呈し、教える者と教えられる者との間に意志の疏通を欠き、人格的接触が少ないことを思うと、予科時代の教育のよさが感じられる。私は山田校長から依頼され、一学年で一時間ずつ、キリスト教学の講義をすることとなり、昭和二十一年から予科が廃止になる同二十三年までの三年間、一クラス一時間ずつ合計五、六時間の講義を試みた。その頃のことで私の印象に残っていることの一つは、その時分、学徒動員から復学した学生たちが少なくなく、彼らは金ボタンこそないが、かつて

の軍服をまとって通学しているのみならず、戦場での体験から素直にクラスの学課にとけこめない者が多かった。殊に私の教えるキリスト教学などに対しては全然関心がないばかりか、むしろ露骨な反感を抱き、「ソンなものを聞いてやるものか」という態度を示し、あるクラスでは数人が授業のはじめから、頭を机につけて授業無視のジェスチュアを示し、はなはだ不愉快であった。しかし頭からその態度を叱っても逆効果と考えた私は、「どうしても頭をあげて講義を聞かせてやらねば」と、真剣な気持ちで頭を机にひっつけたままの学生の方にたえず視線を注ぎつつ、平然と授業を続けた。こうした状態が何時間続くかと思ったが、そのうち、一人一人がおいおいに頭をあげはじめ、六、七週間のちには、全部が頭をあげて聞くようになったということもあった。その反面、生徒の中には、真剣にキリスト教を求める人たちも多く、中には神学部に進む決心をした人たちもいた。現在日本アカデミー関西セミナーハウス館長村山盛敦氏ももその一人であった。

三

そのころ、同志社内には、女子専門学校の他に、経済専門学校、外事専門学校、工業専門学校と三つの専門学校があった。そのうち経済専門学校は岩倉にあって、現在の同志社高校のあるところに校舎があり、主として南側の体育館のあたりに講堂と教室があったが、全部が木造の建築でまことに粗末なものであった。また京福電車三宅八幡前から同校までの通学道は、ひどいぬかるみで、雨の降った日の通行はまったくひどいものであった。泥の中に足をつっこんだ学生が友人に「おい、もう帰えろうか」と歎息まじりに大声でいう者もいるぐらいであった。私はそこでも依頼されて、一年生に対してキリスト教学の講義を試みた。前期は教室で一般論を、後期は特論として講堂で希望者に講義を続けた。同校は鷲尾元校長以来、宗教的雰囲気の濃い学校で、全体として宗教的な気風を漂わせていた。従って、学生も熱心に講義を聞いてくれたが、なにぶん戦後の落ちつかない時代のことで、教室での講義の際は、最後列の席にいる連中には出席簿を読んだあと、うっかり眼を離すとクラスを抜け出すものがいたり、うしろの方で、こっそり煙草を吸っているものがいたりするので、こちらもうっかりできず、煙が出ているのを見つけるとたしなめたり、脱出者の出ないように、黒板に向かって字を書く時は、視線を半分は黒板、半分は学生にむけねばならないこともあった。しかし、熱心に聞く者も多く、特に特論のクラスは愉快であった。ある時、ひとりの学生が、卒業の際、湯浅元総長から、「同志社で一番印象に残ったものは何か」と聞かれて、「茂牧師のキリスト教特論の講義です。」と答えたという事を、湯浅先生から聞かされ、誠に愉快さと光栄さとを感じたこともあった。

私はこのほか外事専門学校と工業専門学校とから依頼され、一年生のクラスでキリスト教学を講義した。ともにその頃残っていた木造の建物徳照館と講武館で話した。いずれも学生は温厚で、まじめに講義を聞いてくれた。この時分、私は神学部で

牧会学や説教学を講義していたが、それらを含めて全部で十六時間の講義を続けたが、その謝礼が八百円であった。いかに物価の安い時分とはいえ、十六時間で八百円とは常識はずれであるが、母校の宗教々育のためと思い。そのことは度外視して奉仕をしたことであった。

四

終戦ののち、当時の神学部長であった有賀鉄太郎教授は、牧野元総長の意志にそい、同志社精神教育委員会を組織し、自分自身その委員長となり、各学校のその方面の関係者の参加を求め、相互の連絡をはかり、同志社内の精神教育の伸展をはかった。私もその委員として参加し、幾度か神学館で委員会を開いた。この委員会はなにぶん同志社全体の宗教々育の連携というむつかしい仕事に当ろうとするものであって、各学校にはそれぞれの異った事情があり、ことに大学と中高とがすぐに連絡をとるということはむつかしいから、委員会は十分に機能を発揮したとはいえない。これは、今日においても同じではないかと考えられる。その点においては関西学院や青山学院などには学ぶべきものが多いと思う。しかし右の委員会は戦後において立ち上がろうとする同志社内の宗教活動のあらわれと見ることができると思うものである。

また学生間の宗教活動もぽつぽつと始まり、昭和二十三年のクリスマスを迎えて、同志社ではじめてのキャンドル・サービスが、アーモスト館ホールで開かれた。現在の栄光館のそれはあまりにも有名であり、キャンドル・サービスも一般化して珍しくないが、当時はキャンドル・サービスといえば珍しいものであった。私は光栄にもその時の集会の計画にあずかり、説教をすることを依頼された。出席者は多くなかったが、それでもアーモスト館のホールは満員で、司会をした神学生の態度も敬虔で、全体の雰囲気としてはまことに宗教的で、クリスマスの歓びをよくあらわすものであった。これがのちに栄光館に移り、次第に盛大となり、京都の名物の一つとなっていることは周知のことである。

総体的にいえば、終戦から昭和二十三、四年までの頃は、物資も不足がちであり、人心も戦後の虚脱から起ち上ろうとし、一般にキリスト教に対する関心は強かった。従って学生の気風もキリスト教に対しては熱心で、真摯な態度で教を聞こうという気持ちが強く感ぜられた。

要するに終戦後の同志社の宗教々育は、その人材や制度においては十分とはいえなかったかと思うが、これに従事する教師も、これに参加する学生も、同志社の立学の精神とキリスト教の関連は密接であるとの立場から、彼らのキリスト教に対する態度は、新鮮でありまた発溂としたものであったと見るのは、私の偏見であろうか。移り行く時代の波ははげしくとも、学生たちが創設者新島先生の信仰に学び心より神を畏れ真理を学び、新しい時代の開拓者となることを切望してやまないことを附記して拙文の結びとする。

（大12大神卒・同志社教会名誉牧師）